

戦争経験者による体験談

鴨下委員

大正15年の3月の生れですから、数え90歳になりましたので、前でしゃべることとも非常に下手になり、そういう男の思い出しながらの戦争体験ですのでそのつもりで聞いていただきたいと思います。大正15年生まれというのは、昭和の数え年でゆきますと、昭和20年のときにちょうど20歳なんですね。ですから、いわば生れてからほとんど戦争の影を背負って生きていたわけです。しかし、子どもはそんなことは感じないで戦争ごっこのときに兵隊の真似をすとか、そんな程度の割合のどかな日常でした。申し遅れましたが、小金井で生れてずっと小金井に住んでいるんです。それで今度選んでくださったのだと思うんですけど。考えて見ますと、昭和18年ですか、18年の2月にガダルカナル島の撤退というのがありました。実はこれを聞いたときに日本はもう負けたと思いました。というのは、そのガダルカナルの攻防戦のときにラジオなどでも将校さんがあるいは向こうから帰ってきた人たちが「ここがせめぎ合いの最前線なんだ。ここでアメリカを退ければこの戦争は山がみえるんじゃないか」とそんなようなことを言っていたんですね。それが撤退ということになって、つまり負けて逃げ帰ったわけです。大木惇夫という詩人が飢島、飢えの島だという詩集を発表して有名でしたね。それを見てこの戦争は負ける、負けていってもしようがない。負けたと言って逃げ出すわけには行きません。周囲は一生懸命戦っている。そういう中で中学時代を過ごしていったわけです。

その年の9月、イタリアが降伏、無条件降伏ですから、欧州戦線の片がつき始めたんですが、ガダルカナル撤退だということを聞き入れて、旧制中学でしたけれども、これでは、早々戦争の役に立たなければいけないんじゃないか、私もずいぶん考えまして、東京府立航空高等学校というのを希望し、幸いそれが受けましたので立川の中学を卒業し、南千住のほうへ通いました。ちょうど私たちが進学するときに境目でして、東京都制に変わりましたので、すべてそれから都立に変わったんです。高等工業という制度も専門学校に変わり、それからは都立航空高専生という名前で戦争を体験することになりました。行ってまず驚いたのは建物の強制疎開に勤労奉仕することでした。広い密集したところは、道筋のようにうちぬいて壊し、焼けてきてもそこまで止まるようにしようというわけで、かなりいろんな物が入っている家なんかを壊しまして、悲惨だなと感じました。

航空高専には航空事情に関心のある友達が入ってきていました。飛行機の音を聞いただけであれは何だと発動機の音で機種を聞き分けるのです。そういう連中ですから色々戦況についてもひそひそ話しました。もうだめだなというと、そうだなと言う。欧州戦線を片付けたらB29をインドを通過して早く日本戦線に持って来る。持つてくるのに飛行場を大きく作らなければならないから、サイパンに必ず上陸してくる。サイパンを攻略されたらもう日本はだめだぞ。めちゃめちゃにやられちゃうぞ、ということ話し合っていたわけです。そのサイパンにアメリカ軍が上陸してきたのが翌年19年6月の15日で、3万人が全滅したのが、7月何日かです。ほとんど1ヶ月で攻撃されちゃったんですが、その頃は火炎放射器で穴を焼き焦がしちゃう荒っぽい方法でどんどんサイパンを占領しちゃったんです。攻略したら、穴ぼこは鋼鉄板でふさいで飛行機が発着している。そういう話を聞きまして、まあかなわんなと感じました。サイパンを落とすとすぐに2~300機のB29が東京あるいは日本のあちこちの都市を大空襲しました。その頃には爆弾が日本の家屋には能率がよくないというので、生ゴムを仕込んで壁や柱にくっついてそこで燃え出すというものを発明してそれをポカポカと落としましたから、もうとても手に負えないわけです。まあともかくもサイパンが落ちてから大変なことになったと思いました。

その年の8月23日に法令で学徒動員が発令され、今までのような細かい勤労奉仕は打ち切られ、長期動員の学徒という身分になりました。行く先は中島飛行機三鷹研究所です。現在のキリスト教大学あたりが中心で南と西に3倍くらい敷地をもち、中島の本荘群馬の太田から引越しをし、設計試作を進める部署でした。航空機科40、発動機科40、計80名は細かく分かれて配属されました。私は機体設計に2人組で割りあてられたのです。設計をやっていた人たちが応召していく。その後をわれわれ多少製図ができたり、飛行機関係の計算の相手ができる者が埋めているのですが、私らには自信がなく、俺たちがやるようじゃだめだろうな、三菱(ゼロ戦)はすごいらしいぞ、とひそかな情報交換をしていました。私たちが行ったときは、キー87と登録された戦闘機の機体の完成段階で、最後の破壊試験を徹夜で実施するのを見せてくれたりしたのですが、これは要求された性能が出なかったため、没、つまり正式採用されませんでした。キー87はB29を撃墜する目的の高高度戦闘機だったので、B29を落とすことは出来なくなったわけです。足元に火がついた状況で、機体設計部はキー115というのを手がけたのです。私は水平尾翼を任されました。学徒なりに張り切って図をかきました。略して誰でもがタカケンと呼んでいた研究所は西端が小金井市境でしたから、私が生まれ育ったはけの道の突き当たりがタカケンの西の通用

門でした。動員が始まってから、私は徒歩で20分あまり、門番もないこの通用門から出入りしていましたから、徹夜に近い仕事も平気でした。キー115の試作と併行して研究所全体の疎開も細かい計画に従って進みました。予定地は東北、岩手県の黒沢尻です。

3月10日の東京大空襲はそんなときでした。「東京が燃えている！」小金井の畑からは遠くではあるが東の空の半分くらいまでが赤く染まっていました。翌々日くらいか、町の警防団に要請があり、焼け跡の始末にトラックに乗せられて被爆地に出向いた兄たちは真黒な姿で帰ってきました。焼死体を放り投げてトラックへ積むのに焼けぼっくいのように「ガサッガサッ」と音がしたこと、屍臭が沁みこんで飯が食べなかったことくらい、僅かな話しかしませんでした。タカケンに出勤はしましたが、僅かの学友が出てきていて、大火の物凄さを聞かされました。タカケンで用意して、かなりの人数が利用していた新宿の寮は焼け失せたのですが、死者は柴山という中隊長格のいい男が防火の炎の中で不明になった1人でした。設計にいた竹川は非常に衰弱して声もはっきり出せないままで出勤しました。焼け跡へ行って、防空壕の中に入れといたレコード盤の山が白くその形を保っているのに、指で触ったら灰の山ですぐ崩れてしまった。1,000枚近くあったのに、と非常に残念そうに話をしました。こうして、実際に負けた側の立場になって、「戦争って何だろう、勝つ負けるということではなくて、文化を破壊する。文化を破壊していくのが戦争じゃないか、もちろん人も殺すし、向こうの財物も壊しちゃったり奪おうとする。しかしこれはね、人間が営々と築いてきた文化を破壊するものであるということをつくづくそのとき思いました。もうこういうことはやっちゃいかんというふうに思った。

タカケンはキー87がだめになったあと、キー115という応急的な飛行機を手がけ、私たち航空高専生も全員この完成に力を貸したのです。3月の何日かに調布飛行場の一端で「進空式」のようなお披露目をし「剣-I」と正式名称を受けました。

上陸してくる敵に小型爆弾を落として食い止めようという狙いで「隼」より小さめの機体に、保有中の隼のエンジン200近くを活用しようというものでした。剣-Iが生産過程に入るのをにらんでもかもしれませんが、学徒も疎開に同行してくれと頼まれましたが、機体科の僅か5名が応じただけです。5月の初旬に黒沢尻の呉服屋に同宿先を割り当てられ、黒沢尻女学校(機外設計部)に通いました。ここまで来たのに、艦載機の機銃掃射を受けました。8月15日の終戦の詔勅はここで聞きました。3月10日のときに心に受けた傷、これは戦争というものはどういうものであるかということをつくづく反省というか、突き詰めて考えた一日になったわけです。